

季節風

2020. 8. 6

夏休み特別号

山鹿市立鹿北中学校

文責：郡 一路

七十五回目の「原爆の日」

広島 (昭和二十年八月六日)・長崎 (昭和二十年八月九日)

『あの日、広島と長崎で何があったのか。私たちは決して忘れてはならない。』

私は、けがをして逃げる時に、若いお母さんが死んだ首のない赤ちゃんを背負って泣きながら逃げておられる姿を見て、たまらなくかわいそうでもに泣いた。

広島 当時十六歳女性

被爆距離一・五km

一瞬にして倒壊した家屋の下敷きになって焼死した母の姿が今でも眼底に焼きついている。私は、家の土台のコンクリートのすき間から上向きに倒れている母を見つけた。「肩のあたりをおさえつけている物をのけてくれ」と言う母の言葉にどうすることもできず、三十分前後で火がまわってきたため、最後の言葉をかわして私はその場を去った。母の後に後ろ髪をひかれる断腸の思いがあった。目鼻の前におおいかぶ

さった建物におさえつけられたままで、じりじり迫ってくる火の手、そして死の間を待つ気持ちといったら、どんなに苦しいことだろうか。私は今でも自分の力なさを母を殺したと思っている。それだけに原爆・核兵器が憎い。

広島 当時十六歳男性

被爆距離一・五km

私は、両親を五日目にやっと見つけることができました。もう人間の炭になってどうすることもできず、手、足らしい形はありません。書きたいことは山ほどありますが、思い出すとぐちゃぐちゃ、腹立たしさが増してきます。毎年来る八月六日、思い出さなくありません。

広島 当時十八歳女性

被爆距離二・〇km

= 平和への願い =

【広島】

『安らかに眠って下さい
過ちは繰り返しませんから』



原爆ドーム

『ちちをかえせ ははをかえせ

としよりをかえせ こどもをかえせ
わたしをかえせ わたしにつながる
にんげんをかえせ
にんげんの にんげんのよのあるかぎり
くずれぬへいわを へいわをかえせ』

【長崎】

『のどが乾いてたまりませんでした。
水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました。



平和祈念像

どうしても水が欲しくてとうとう油の浮いたまま飲みました。』

長崎の平和祈念像の右手は原爆を、左手は平和を、表情は追悼の意を表わしています。
※広島は今日、長崎は9日『原爆の日』をむかえる。

電車のつり皮にぶらさがったまま黒こげになり、腹巻だけ焼け残った男の人。両手の中から一瞬のうちにわが子を奪われて気が狂い子守り唄をうたっていた母親の姿。全身赤紫色にヒカヒカになり、幽霊のように「おかあさん」と言いながら両手を前にして、ふりふりと歩いている女子学生、母親は息がないのに、まだ生まれればかりの赤ちゃんが、か細い声で泣いていたこと。眼がとび出し、眼孔が大きく空洞になっていた男の人。思い出せばきりがありません。

広島 当時二十二歳男性

被爆距離一・五km

防空ごうからお母さんが赤ちゃんをおんぶして、三歳くらいの子の手をひきながら出てきたちよつごその時、オレンジ色とカメラのフラッシュのよつな光が頭

上を走ったのです。そして、お母さんと子供が一瞬にしてそこから消えたんです。蒸発したんです。その時私が見たものは煙じゃないんです。水蒸気みたいなものが、そのお母さんと子供からポウーと上がったのを見ました。もうそこには何の姿もありませんでした。

長崎 当時十六歳男性

被爆距離一・〇km

かろつじて実家にたどりの着いた妻と子供はすぐ発病し、妻の毛はさわただけで、そろそろ抜け、歯ぐきは溶け、歯は一本もなく抜け落ち、高熱が続き十九日に子供が、二十日には妻が、「さよつなら」「さよつなら」と言いながら死んだ。妻は二十歳の若さであった。もう絶対に原爆は許してはならない。

長崎 当時三十歳男性

被爆距離一・五km

だれかがやかんで水を配ってました。全身黒こげになり、ただ一ヶ所皮膚が残った手のひらを差し出して長女が「あの水がほしい」と叫びました。私は「私たちがくれるわけないでしょう」としかるほかなかつたのです。その時、一人の兵士が水でぬらした泥んこのタオルを持ってきてくれました。娘は、この世で一番おいしいものを飲むように、タオルをしゃぶりながら死んでいきました。

長崎 当時三十一歳女性

被爆距離一・〇km

福島市出身の詩人、長田(おさだ)弘さんは、東日本大震災の後、「朝が明けて、陽が高くなって、やがて日が暮れてとうとうふいに、だんだんと変わってゆく何でもない一日は、ありふれた奇跡だった」と語っています。今日を生きている自分、そして命を、大切にできる一人一人に。